

『建礼門院右京大夫集』後半の世界にみる自然

山内ゆか

はじめに

本稿では『建礼門院右京大夫集』（以下『右京大夫集』と略す）において、作者右京大夫の恋人平資盛への思いを、自然を詠んだ歌を中心に考察を試みた。

『右京大夫集』204番歌、資盛都落ちの歌の詞書に、
……さすが心あるかぎり、このあはれをいひ思はぬ人はなけれど、
かつ見る人々も、わが心の友はたれかはあらむとおほえしかば、
人にも物もいはれず……

とある。資盛との別離後、特に見られるのは、悲しみを一身に背負ったように、「他人には分らない」と、自身の内に抱え込んでしまつ右京大夫の姿である。そして、彼女が悲しみの中で向かい合つたのは、人為の転変にもかかわらず、変化することのない自然だけ

であつたように思われる。自然と向かい合つた「比叡坂本の旅」の意味を考えてみたい。また、自然の中でも「空」を詠んだものが、特に右京大夫の特徴を示しているのではないかととらえ、考察を進めたい。

引用文は、糸賀きみ江氏校注「新潮日本古典集成」『建礼門院右京大夫集』に拠り、必要に応じて私に傍線をつけた。（以下「集成」と略す。）但し和歌の引用については上句、下句で一字分空けることにした。尚、その他の和歌の引用は、角川書店『新編国歌大観』に拠る。

第一章 右京大夫の自然を詠んだ歌について

まず、右京大夫が自然をどのように表現したか、という点について、既に指摘されている点をあげてみたい。村山恵美氏は、「自分

自身の心理と自然を融合させ、時には彼女の運命との比較の対象として自然を取り扱っているのである。^①と述べられた。また、糸賀きみ江氏は、「対象の自然に焦点を合わせているが、その描写だけに終始していない。」「集成頭注」と述べられた。右京大夫は、彼女自身の体験をもとに、自らの心情を自然に託したと考えられ、自然を詠んだものには、右京大夫の特徴が現われていると考えてよいであろう。ちなみに、本稿において検討対象としている、資盛との別離後から、「比叡坂本の旅」まで（204-258）の五五首をまとめてみる（付表参照）。五五首のうち、資盛のことを思って詠んだものと考えられる歌は四十首であり、次のように分けられる。

詞書或いは歌において自然が関連している歌 二三首

” 関連していない歌 一七首

半数以上の歌が、自然と関連して歌われていると考えられるのである。

次に、資盛との別離後の歌（204）から、比叡坂本に向かった冬の旅の終わり（258）まで、重要と思われる歌を取り上げてきた。

205 番歌において、右京大夫は、外の景色をながめている。

月の明き夜、空のけしき、雲のたたずまひ、風の音ことに

かなしきをながめつつ、ゆくへもなき旅の空、いかなる心

ちならむとのみ、かきくらする。

205 いづくにていかなることを思ひつつ こよひの月に袖しほ
るらむ

恋人を思つ「ながめ」の視線を指摘できる歌であり、204 番歌の詞書にうったえたように、「心の友」のいない彼女の視線は、自然に向いている。また、210 番歌では、ゆかりの人と梅見にでかけている。梅見ではあるが、梅の様子は、連れの人の「梅の花なべてならずおもしろき所あり」との言葉と、「まこと世のつねならぬ花のけしきなり」との、短い感想でしか描かれていない。

210 思ふこと心のままに語らばむ なれける人を花も俣ばは
資盛ゆかりの梅であることのみが右京大夫の頭を占め、「思ふこと
心のままに語らばむ」という、共に資盛をしのぶことのできる存在
を求めている歌になったのであろう。

都落ちした資盛との贈答（216-218 219-221）を

最後に、資盛は帰らぬ人となる。資盛戦死の報を聞いてからの右京大夫は、「ただほればれとのみおほゆ」（222）という状態であった。「さすがに現し心もまじり」（224-226）とはいっても、「かなしさもなほまさる心ちす」（224-226）という状態なのである。

ただとかく、さすが思ひなれにしことのみ忘れがたさ、い

か、でいかで今は忘れむとのみ思へど、かなはぬ、かなしく
て、

224 ためしなきかかる別れになほとまる 面影ばかり身にそふ

そ憂き

225 いかで今はかひなきことを嘆かすて 物忘れする心にもが

な

226 忘れむと思ひてもまたたちかへり 名残りなからむことぞ

かなしき

村山氏は、「226の歌に表現されているような「忘れむ」という
思いと「なごりなからんことぞかなしき」といった二つの全く逆の
思いが錯綜していたのである」と指摘された。② 一首だけではなく三
首の連なり(224→226)からも、「二つの思いの錯綜」が読
み取れると指摘したい。その思いの錯綜が、なごりを求める行為へ
となつていくのである。なごりを求める行為は、共にしのぶ存在を
求めていることから、見えてくると思われる。この行為について
は、歌を見ていく上で、鍵となると考えているので、特に注意して
いきたい。

230番歌に、資盛亡き後初めて、細やかに自然が描写されてい
る。

夏深き頃、つねにぬたるかたの遺戸は谷のかたにて、見下

したれば、竹の葉は強き日によられたるやうにて、まこと
に土さへ裂けて見ゆる世のけしきにも、「我が袖ひめや」

と、またかきくらするに、蝸は繁き梢に、かしがましき

まで鳴き暮すも、友なる心ちして、

230 言とはむなれもやものを思ふらむ もるともなく夏のひ

くらし

「心の友のいない」(204) 右京大夫が、「友なる心ちして」と
蝸の鳴く声に、悲しみを分かち合おうとしているのである。それま
では、222番歌資盛亡き後から、229番歌まで、まわりの出来
事と自分の感情のみの描写であった。その点において、資盛との別
離後と、詞書や歌の傾向は変わっていない。この歌で、部屋外の
景色を見、鳴く蝸の声を聞いて、少しずつ自然描写が始まる。まわ
りを見る心の余裕が、少し出てきたといえるのではないか。しかし
ながら、内にこもってしまう彼女の気持ちは、人との心の交わりを
拒絶するようにして孤立し、自然のみに向いていたのであろう。

230番歌に続いて配置されたのは、資盛ゆかりの庭(233→
236)、平家ゆかりの人の屋敷跡(237)、大原の女院(239

→241)を訪れる歌群であった。

それらは、224番歌から226番歌(名残りなからむことぞか
なしき)の連なりから見られる「なごり」を訪ねていく行為である

といえるのではないか。ところが、荒れ果てた庭と、資盛不在という昔と全く変わってしまった状況を、自らの眼で実感してしまいうこととなる。

……せめてのことに、忍びて渡りて見れば、面影は先立ちて、またかきくらさるさまぞ、いふかたなき。みがきつくるはれし庭も、浅茅が原、蓬が袖になりて、律も苔もしげりつつ、ありしけしきもあらぬに、植糸し小萩はしげりありて、北南の庭にみだれふしたり。

(略)ただひとりながむるに、……れいの、物もおぼえぬやうにかきみだる心のうちながら、

2 3 3 露消えし跡は野原となりはてて ありしにも似ずあれはてにけり

2 3 4 跡をだに形見にみむと思ひしを さてしもいとどかなしさをぞそふ

2 3 4 番歌は「跡をだに形見にみむ」と、なごりを求めに来たことが、直接に歌に詠まれている。

2 3 6 我が身もし春まであらばたづね見む 花もその世のことな忘れそ

「花もその世のことな忘れそ」との歌は、やはり「心の友」のいな右京大夫が、思い出を分かち合える存在を求めているからこそ、

詠まれたものであろう。

さて、大原に訪ねた女院も、右京大夫にとっては、「青春のなごり」とも言えるべき存在であった。しかしながら、その再会は「夢うつつともいふかたなし」というつらい状況であった。^③

2 3 3 番歌から2 4 1 番歌あたりの状況として、「なごりながらん」ことが悲しいと、なごりをたずねていた。その結果として、昔と今のあまりに違いすぎる状況を、ただただ実感することとなったのである。そして、

2 4 2 なげきわびわがなからましと思ふまでの 身ぞわれながらかなしかりける

と、「死にたい」とまで思いつめるのである。資盛亡き後、「死」を考えたことが記されるのは、この歌が初めてである。ある種のなぐさめとして「なごり」を訪ねるのであるうが、なぐさめとはならず、死を思うまで落ち込んでいる。死を思うまで落ち込んだ右京大夫は、どうしたか。なごりをたずねても甲斐もなく、「なぐさむことはいかにしてかあらむなれば」(2 4 3、2 4 4 詞書)という気持ちになっている。そして旅に出るのである。

なぐさむことはいかにしてかあらむなれば、あらぬ所たづねがてら、遠く思ひたつことありしにも、まつ思ひ出づることありて、

243 帰るべき道は心にまかせても 旅だつほどはなほあはれな
り

244 都をばいとひてもまたなごりあるを ましてと物を思ひ出
づる

先程指摘した、死まで考えたことに加えて、「あらぬ所」とある
ので、今までの、なごりを求めてゆかりの地などを訪ねる行為は、
なくさめとならなかつたことが、読み取れるのではないだろうか。
「あらぬ所」である比叡坂本の旅について、この旅に出たことの意
味から考えてみたい。鈴木則郎氏は、『建礼門院右京大夫集』と
『平家物語』^④において、

「せめてのことに、忍びて渡りて見れば云々」は、右京大夫が
旅や自然に求めていたものが何であるかはつきりと示唆するで
あろう。彼女の旅は、資盛喪失の心の痛手を癒すためのものでは
なくかえって想念の世界に資盛を甦らせ、現在を共に生きるため
のものである。

と、旅の目的とその自然描写について述べられている。鈴木氏は、
また、「自然は心中に資盛を甦らせる再生の契機となる。」と述べら
れているのだが、そのような自然を求める、という明確な意識を持
って、旅に出たのであるだろうか。今まで歌を見てきたが、ここまで右
京大夫がはつきりとした意志を持って、自然を求める旅に出た、と

は少し考えにくいのである。述べてきたように、詞書や詠歌（22
4-226）にみられる、「二つの思いの錯綜」（村山恵美氏）から、
なごりを求めても余計につらい、という過程があった。鈴木氏が、
根拠とされている「せめてのことに……」と資盛ゆかりの庭を訪れ
たとき（233-236）は、まだなごりを求めに行つた段階であ
る。求めたがなくさめとはならず、余計につらい思いをした過程を
経て、「いっそのこと資盛と関係のない所へでかけてみよう」とい
う旅とは考えられないだろうか。資盛を再生させる契機として自然
を求めた、というような、積極的な明確な意識を持っていたわけで
はなく、資盛の死から立直れない自分を持って余しての、やむにやま
れぬ思いを抱えての旅だつたのではないだろうか。

第一章 空をながめた歌

第二章では、特に自然の中で『右京大夫集』の特徴として考えた
「空」を詠んだものを取り上げたい。まずは、旅の歌を順に追つて
ゆく。

250番歌は、詞書によると、空をながめて詠んだものではある
が、糸賀氏は、「物思いの尽きない作者の心象」（集成頭注）と指摘
されている。

はるかに都のかたをながむれば、はるばるとへだたりたる

雲居にも、

250 我が心うきたるままにながむれば 　いつくを雲のはてとし

もなし

資盛と別れてから、右京大夫の空をながめた歌は、悲しみに彩られている。空をながめていることが、なくさめとはなっていないのではないだろうか。生前の資盛を思ってながめる空は、「待つ」とに通じていた。「ながむべき空」(160)といった表現も見られた。しかし、資盛亡き後は、待つても甲斐はないのである。

251番歌は、有名な星月夜の歌である。ここで初めて「なのみならずおもしろくて」と自然に対する肯定的な表現をしている。資盛との別離後の自然に関係した歌を検討して、明らかにしたこと、今までのかなしさをより一層感じてしまったり、描写のみの淡々とした自然のとらえ方とは違う、積極的な感動を、初めてこの歌で書き記している点である。空を見ていることにも注目したい。殊に、詞書の生き生きとした描写は、和歌に表現しきれぬものを詞書が表現しているような印象すら受ける。途中から引用する。

……空を見上げたれば、ことに晴れて浅葱色なるに、光ごとことき星の大きな、むらなく出でたる、なのめならずおもしろくて、花の紙に箔をうち散らしたるによう似たり。今宵はじめて見そめたる心ちす。さきさきも星月夜見

馴れたることなれど、これはをりからにや、ことなる心ちするにつけても、ただ物のみおぼゆ。

251 月をこそながめなれしか星の夜の　深きあはれをこよひ知

りぬる

星空に心惹かれつつも、「ただ物のみおぼゆ」と資盛の死へと、思いが立ち返ってしまうのである。馬場あき子氏は、「空への視線―右京大夫の星―」において、

……美的興奮にさそいこまれた星の夜空も、亡き人の忘れがたい喪の「をり」の意識が覚醒するままに、深い物思いへと沈潜せざるを得ないのであり、そこではじめて「おもしろ」さは「深き哀れ」に結びついてゆくのである。

と、述べられている。次の252番歌も、自然を肯定的にとらえ、「おもしろき」ことに眼が向いているので上げておきたい。

……宿へ出づる道すがら、簾を上げたれば、袖にもふところにも横雪に入りて袖の上は、はらへどもやがてむらむらこほるがおもしろきにも、見せばやと思ふ人のなき、あはれなり。

252 なにことを祈りかすべき我が袖の　氷はとけむかたもあらじを

「おもしろき」ことに目が行くのであるが、「見せばやと思ふ人のな

き。あはれなり。」と、結局は、251番歌の「ただ物のみおぼゆ」と同じように、資盛不在の悲しみに立ち返ることとなる。251番歌、252番歌は、資盛亡き後、初めて肯定的に自然をとらえていることがあげられた。ところが二首とも、資盛への思いに立ち返って筆を置いている。

今まで歌を見てきたが、資盛を喪つて以来、内へ内へと向かい続けていた右京大夫の悲しみの心が少しずつ癒されていると言えるのではないだろうか。自然と触れ合うことで、回復へと向かいつつあると言えるのではないだろうか。しかしながら、資盛への思いに立ち返つてしまつのであるから、まだ、回復はできていないと考えられる。

次の253番歌で、また空をながめるのである。

……かつがつあまぎる空をながめつつ、

253 さらでだにふりにしことのかなしきに 雪かきくらす空も

ながめじ

夜もすがらながむるに、かき曇りまた晴れのき、……

254 大空は晴れも曇りもさだめなきを 身の憂きことはいつも

かはらじ

向かう視線は「空」にある。しかしながら、資盛を思って空をながめよつと思つても、もはや空は、資盛をしのぶよすがとはならな

つたのではないか。253番歌は、「空もながめじ」と、ながめることを、拒絶さえしている。先の252番歌で、横雪の様子を「おもしろき」と肯定していたにもかかわらず、同じ雪の様子でも悲しいのである。「比叡坂本の旅」から帰つた後に配列されている269番歌、270番歌にも、空をながめたものがある。

四方の梢も、庭のけしきも、みな心ちよげにて、あをみどりなるに、小鳥どものさへつるこゑこゑも、思ふことなげなるにも、まつ涙にかきくらすされて、

269 晴れわたる空のけしきも鳥の音も うらやましくぞ心ゆく
める

270 つきもせず憂きことをのみ思ふ身は 晴れたる空もかきく
らしつづ

旅の後も、やはり晴れた空に対して、複雑な思いを抱えたままの自分の姿を詠んでいる。右京大夫にとつて、資盛の亡き後、空をながめることは待つことにならず、「空は恋人を思うよすがとなるもの」ではなくなつてしまった。つまり、歌においても、それまでの和歌に見られた図式が、成り立たなくなっているのではないだろうか。

特に、注目したい歌を上げておきたい。後鳥羽院に出仕して後に通宗の宰相中将の思い出と、その死に關しての一連の歌群（349

353)がある。一連の歌群のなかで、

352 露ときえ煙ともなる人はなほ はかなきあとをながめもす
らむ

とあり、資盛のような入水という死に方は、火葬の煙がただよう空を形見とすることはできない、との思いを詠んでいる。空は資盛を思うよすがとはならないことが、はっきりと表れていると思われる。

352番歌の詠まれた時期は、この「比叡坂本の旅」から、かなり時代が下つてはいるが、空をながめても肯定的には見られない気持ち、資盛亡き後も、変わらず持ち続けていたのではないか。

恋人資盛の入水死という戦乱の中での異様な死に様が、右京大夫の心に強烈な印象を与えているのである。資盛と出逢わなければ、戦乱に全くといってよいほど縁がなかったであろう、宮廷女房である。224番歌に歌われていたのは、資盛の入水死は、「ためしなき別れ」であるという認識であった。

旅の終わりに、琵琶湖を通る。その、257番歌、258番歌において、資盛の死と直接つながる水への関心を考えてみたい。

まだ夜をこめて都のうちへ出づる、道は志賀の浦なるに、
入江に氷しつゝ、よせくる波のかへらぬ心ちして薄雪つも
りて、見渡したれば白妙なり。

257 うらやまし志賀の浦わの水とち かへらぬ波もまたかへり

なむ

海のおもては、深みどりくろくると、おそろしげに荒れたるに、ほどなき見渡しのむかひに、うるはしき舟路にて、

……なつかしからぬけしきにて、……いかにぞ、波に入り
にし人の、かかるわたりにあると思ひのほか聞きたらば、
いかに住み憂きわたりなりとも、とどまりこそせめなどさ
へ案ぜられて、

258 恋ひしのぶ人にあふみの海ならば 荒き波にもたちまじら
まし

海に対して、ある種のなつかしさのようなものを感じているのではないか。例えば琵琶湖ではあるが、波打ち際で、資盛が「波に入りにし」ことを実感していると感じられるからである。資盛の死を経て、海を見つめ直してみたら、海の様子は、右京大夫にとって「好ましくない」ものではあるけれど、空よりもむしろ、資盛をある意味身近に感じられたのではないだろうか。

今まで、資盛との別離後から比叡坂本の旅まで、自然に注目し、歌について述べてきた。自然の中で、特に「空」をながめた歌が重要であると思われる。資盛を思つてながめる空は、待つことにつながらず、資盛の入水死という一種異様な死に方は、火葬の煙がただ

よう空を形見とする、というような伝統的な見方を、右京大夫に許さなかつたのである。そこで、集前半の歌を取り上げ、「空」と「ながめ」に注目していきたい。「空の歌」、「ながめの歌」は一覧にして考察した。⁷⁾

前半で空をながめてよんだものとして、次の歌があげられる。

つねに向ひたる方は、常葉木ども木暗う、森のやうにて、

空もあきらかに見えぬも、なぐさむかたなし。

160 ながむべき空もさだかに見えぬまで しげきなげきもかな

しかりけり

とある。「ながむべき空」とある。また、空が見えたらなぐさめられる、この思いも読み取れる。空をながめることは、右京大夫のなぐさめになっていたことが、示される歌といえるのではないか。それは、「恋人を思つてながめる空」という伝統的な発想にのっとりて詠まれており、「集成頭注」であげられているのは、

おおぞらはこひしき人のかたみかは 物思ふことにながめらる

らむ (古今集 恋四・743 さかめのひとさね)

である。また、他には、

たくれば雲のはたてに物ぞ思ふ あまつそらなる人をこふとて

(古今集 恋一・484)

つれづれとそらぞみらるる思ふ人 あまくだりこむ物ならなく

に

などもあげられるだろう。

糸賀氏は、「ながむ」を大別されている。⁹⁾ 一覧表してみると取り巻く状況によつて、「ながめ」の意味合いは、大きく変化していることが分かつた。『右京大夫集』の中で、「ながめ」は使い分けされていると言つてよいであろう。馬場氏は、先に引いた251番歌への指摘とともに、

右京大夫の「空への視線」は、当初から資盛を思うときにあらわれる特色的な姿勢であり、それが半面にすぐれて武人的であつた資盛との恋の位相でもあつた。

と述べられた。加えて、私見を述べるならば、資盛生前は空をながめることはなぐさめとなつていたが、入水死の後には、資盛を思うよすがとはならず、なぐさめとならなかつたのではないか、という点を指摘したい。資盛亡き後、恋の位相は変わってしまったのではないだろうか。

また、「ながめ」の歌の中から、特に『右京大夫集』の特徴とされている、七夕歌群の歌を並べてみることにする。

275 さまざまに思ひやりつつよそながら ながめかねぬ星合の空

281 彦星の行合の空をながめても 待つこともなきわれぞかな

(和泉式部集 81)

しき

303 ながむれば心もつきて星合の空にみちぬる我が思ひかな
314 なにとなく夜半のあはれに袖ぬれてながめぞかぬる星合

の空

後藤重郎氏が、「建礼門院右京大夫集 七夕歌に関する一考察」^①において分けられたところでは、281番歌から後は、資盛亡き後である。275番歌は、後藤氏の分類では、資盛との別離の頃である。また資盛が生きているのであるから、ながめることは、待つことにつながっていたのであろう。資盛が死んでしまった後の、281番歌では、端的に、「待つこともなきわれぞかなしき」と歌われている。資盛亡き後、空は恋人を思うよすが、なくさめとはならなかったのではないかと考察してきた。七夕の空をながめても、なくさめとならなかつたと、指摘できるのではないだろうか。

萩原真佐子氏は、上冊と下冊の年次表記、執筆態度の違いなどを指摘された上で、「執筆の直接の契機は、資盛の死である」と述べられた。^②比叡坂本の旅において、「わが心の友」と求め、自然に対して「友なる心ちして」と、感情移入し、自然と向かい合って書き記すことで、資盛の死から癒されてゆく段階が読み取れたように思われる。祐野隆三氏の述べられた、「書くことによつて（自己救済を計って行こうとしたのではないか）」との指摘を、積極的に支持し

たいと思われる。資盛の死後、特に、この比叡坂本の旅が執筆の契機となったと言えるのではないだろうか。

おわりに

本稿において、資盛との別離から、比叡坂本の旅までの歌を、自然に關しての歌を柱に据えて、考察を試みた。集前半の歌も、適宜取り上げた。

「心の友」のいない右京大夫の思いが、人に向かわず、自然にのみ向かつていったことが確認できた。感情移入できる自然が、資盛の思い出を分かち合える存在であったのである。それに対して、自分が感情移入できない自然には、「ながめじ」のような態度をとり「憂き」という思いを強く持っていた。例えば、資盛の生前は、恋人を思うよすがとして、「空」をながめていた。しかし資盛が入水死を遂げてからの「空」は、右京大夫にとつて、ながめても待つことに通じず、思うよすがとして詠まれてはいない。「ながめじ」と拒絶するような態度にも出ている。

また、資盛亡き後、「忘れたい」という思いと、「なごりが無いのがなし、忘れてしまうことがなし」といった、二つの思いの錯綜を抱えたまま、なごりである資盛ゆかりの庭や、大原の女院を訪ねていた。しかしながら、なごりを訪ねる行為が、なくさめと

はならないと実感した右京大夫にとって、それらの場所は、「なくさむことはいかにしてあらむなれば」という思いを持ってしまいう存在となつてしまった。そのため彼女は、「あらぬ所」である比叡坂本にでかけたのである。その旅は、資盛との別離と、その死から立直れない心を持って余しての、やむにやまれぬ行為であつたと考えられる。そして、その旅で自然と向き合い、すばらしい星空に出会い「なめならずおもしろくて」（251）などと記した。書き記していくことで、彼女は少しずつ癒されていったのではないか。例えば、旅の後に、平家ゆかりの女性と贈答できるまでには回復している（259、260）。この、旅で書き記したことなどがきっかけとなつて、和歌を詠むことだけではなく、むしろ詞書もあわせて「書く」ことに意味を見出したのではないだろうか。右京大夫は、「なごり」がないことを悲しんでいたのであるが、書き記すことは、資盛の姿をとどめることもなり、彼女なりの供養にもなつたとと言えるのではないだろうか。

自然が詠まれた歌は、『右京大夫集』を読み解くうえで、非常に重要であつたと指摘できる。今後の課題として、資盛亡き後、「空」の歌に見られたように、自然のとらえ方が変化していることを手がかりとして、集前半の歌を再検討してみたい。集前半の成立時期や成立過程の問題に取り組んでいきたいと考えている。どの歌が晩年

の回想による挿入であるのか、という点は、特に興味深い。

注

- ① 村山恵美氏、「建礼門院右京大夫集の一考察―資盛への愛の変遷にふれて―」（『高知女子大園文』12 昭和51・7）
- ② ①に同じ
- ③ 建礼門院徳子の描かれ方は、今関敏子氏の「月―徳子の存在及び星に關連して」（同氏『中世女流日記文学論考』和泉書院 昭和62・3・30）に詳しい。
- ④ 鈴木則郎氏、「建礼門院右京大夫集」と『平家物語』（今井卓爾氏・石原昭平氏他『女流日記文学講座』6 勉誠社 平成2・10・13）
- ⑤ 251番歌は、新村出氏「星夜讚美の女性歌人」（『新村出全集 第五卷』（筑摩書房 昭和46・2・20）を始め、右京大夫の特徴を示す歌として、諸氏が論じられている。
- ⑥ 馬場あき子氏「空への視線」（『國文學』昭和54・8月号）
- ⑦ 井狩征司氏「建礼門院右京大夫集 校本及総索引」（笠間書院 昭和49・4・30）
- ⑧ 深津千賀氏「建礼門院右京大夫集―七夕の歌をめぐって―」（『国文』66 昭和62・1）
- ⑨ 糸賀きみ江氏「建礼門院右京大夫集―ながむ」を視点として」（同氏『中世の抒情』笠間書院 昭和51・3・3）
- ⑩ 同氏、「建礼門院右京大夫集の日記文芸的性格」（同書所収）
- ⑪ ⑩に同じ
- ⑫ 後藤重郎氏「建礼門院右京大夫集 七夕歌に関する一考察」（『名大文学部研究論集』18 昭和46・3）

⑫ 萩原真佐子氏「建礼門院右京大夫集試論―家集編纂時期と編纂意図をめぐって」(『国文目録』23 昭和59・2)

⑬ 祐野隆三氏『建礼門院右京大夫集』における自意識と執筆意図(『日本文芸研究』記念号 平4・9)

付表

資盛との別離(204)から、比叡坂本の旅(258)まで……………五十五首

1 資盛を思つて詠んだと考えられる歌……………四十首

自然が関連するもの……………二十三首	自然が関連しないもの……………十七首
月にしほる袖(205)	寿永元暦の夢まぼろし(204)
風のおびただしく吹く夢に(207)	思ひたゆむことなき明け暮れ(206)
梅の花に資盛をしのぶ(210)	死を思う(208・209)
	資盛―春の訃報(222)
	別れの悲嘆(224}226)
	昔の手紙に涙 経供養(227}229)
蛸とともに泣く(230)	神も仏も恨めしく(231・232)
北山の思ひ出の邸で(233}236)	憂きこと聞き重ねぬれば(238)
焼跡の虫の声(237)	ただ死にたしと(242)
	旅を企てる(243・244)
比叡坂本の雁(245)	
逢坂山の嵐(246)	
雪の朝の橘の追憶(247・248)	
鳴子の音も物がなし(249)	
浮雲の心象(250)	
星月夜のあはれ(251)	
わが袖の氷はとけず(252)	

曇り雲の憂ひ(253)	
晴れ曇りさだめなし(254)	
枯野(255)	
氷むせぶ谷川(256)	
志賀の浦の雪(257)	
波の底の人恋し(258)	

2 資盛のこと以外の歌……………八首

- 変り果てた平家の人々(211)
- 捕はれの重衡を悲しむ(212・213)
- 維盛―那智に入水と聞き(214・215)
- 大原に建礼門院を訪ふ(239・241)

3 贈答歌……………七首

- 資盛―最後の便り(216・218 右京大夫 219・221 資盛)
- 資盛―春の訃報 弔問に対して(223)

歌群の説明は、新潮集成〔小見出し〕による。(は、私に加えたもの。)